［時代の証言者］共産党・不破哲三（16）／地方出張で集めた土人形

2010.11.23　朝刊　13 頁

党書記局長になると、遊説などで地方を歩く機会が増えました。当初は名産のお菓子などを買っていましたが、やがて郷土玩具となり、1970 年代後半には土人形に重点が移ってきました。

78 年に東京・上野のデパートで開かれていた飛騨高山展で、妻が歌舞伎の先代萩に登場する「政岡」の土人形を気に入ったんですが、4000 円もしたんで決心がつかず帰ってきてね。２人でもう一度行き、思い切って買ったのが始まりです。

≪78 年 8 月、日中平和友好条約が締結された。11 月の自民党総裁選では、福田赳夫首相が予備選挙で大平正芳氏に敗れ、「天の声にも、たまには変な声がある」という言葉を吐いて退陣した。同年の大卒男子初任給は平均 10 万 5500 円。国鉄（現 JR）の最低運賃は 7 月に 80 円になった≫

相模原市の自宅には、収集した土人形を並べた一室がある

土人形は京都の伏見が起源とされ、殿様や侍が領地の殖産興業のために作らせたり、土産にもらった人が作り出したりして広まったようです。同じテーマの人形は各地にあるけれど、やはり、その地方独特の風情や味わいが出てきます。そこが気に入ったんです。

無名の人たちの作品ですから、作者や年代の分からないことが多い。それでも、人形の胴の中に突っ込んである古い新聞紙の日付や筆跡から、年代がわかる場合があるのも面白いですね。

出張先で車の移動中、よく骨董(こっとう)品店をのぞくこともあります。顔見知りになった店の人が、江戸時代の貴重な人形を持って演説会の会場まで来てくれたり、掘り出し物があると自宅に送ってくれたりしました。

今、土人形だけで 700 体ぐらいかな。張り子などの郷土玩具も含めると、かなりの数になりますね。

若い頃は奥多摩の山をよく歩きました。その後しばらく遠ざかっていた山に目を向けたのも、書記局長になってからでした。

当時体重が 70 ㌔を超えており、はじめは山道を敬遠し、娘を連れて伊豆の海岸、それほど歩かなくていい山すそを選んでいました。

信州の八ヶ岳のふもとに党の寮があり、夏休みは家族とよく過ごしました。八ヶ岳の 2000 ㍍級の峰々はまだ高嶺(たかね)の花。頂上まで登るようになったのは、80 年代に入ってからでした。

南アルプスへの挑戦に意欲を燃やす転機となったのは、87 年の「いっせい地方選挙」（統一地方選挙）の最中に心臓発作に見舞われたことでした。治療が終わった時、医師が「不破さん、もうアルプスも平気ですよ」と予想外の太鼓判を押してくれたのです。

翌年、58 歳の年の仙丈ケ岳を手始めに、事情が許す限り夏は南アルプスに足を運び、90 年代までに北岳、間(あい)ノ岳(だけ)を筆頭に 13 ある 3000 ㍍級峰の登頂を果たすことができました。

山歩きは、自由に色々なことを考えるのにいいんです。道に迷い、暗闇の中でじっとしていた時、論文の構想を練り、翌日から書き始めたこともありました。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（17）／革新自治体　次々に誕生

2010.11.24　朝刊　10 頁

≪１９６７年の統一地方選では、最大の焦点とされた４月の東京都知事選で社会、共産両党が統一候補として推薦した新人で経済学者の美濃部亮吉氏が、自民、民社両党の推薦候補を破って当選し、首都に「革新知事」が誕生した。都知事選をモデルにした共闘方式による革新自治体は、その後全国各地に広がった≫

美濃部さんの「後見役」で、社会党の後ろ盾とされていた経済学者の大内兵衛・元法政大総長たちが共産党本部を訪ねて来たのは、６７年２月のことでした。

我々は都知事選で独自候補を立てる方針でしたが、大内さんは「美濃部を推したい。ぜひ、共闘してほしい」と持ちかけてきました。

東京都知事選で当選し、初登庁のあいさつをする美濃部亮吉都知事（1967年４月）

そこから話が始まり、３月１１日には社共両党の統一協定ができたんです。

革新自治体が広がると、自民党も私たちを強く意識するようになりました。

都知事選型の共闘によって、蜷川虎三さんが６選を勝ち取った７０年４月の京都府知事選前の話です。政府の７０年度予算が成立した時、佐藤栄作首相が初めて国会内の共産党控室にあいさつに来ました。自民党は民社、公明両党と３党連合を組んだから勝てると思ったのか、「次は京都でやりましょう」と言われたんです。

７１年の大阪府知事選では、開票状況を見ながら与野党共同記者会見が行われました。７０年に大阪万博を成功させ、自民党の田中角栄幹事長は勝利を信じ、自信満々でした。ところが、第１報は革新共闘の黒田了一さんが１位です。角栄氏は「まだまだ、まだまだ」と頑張っていたんですが、間もなく黒田さんに当確が出ました。「共産党に選挙のやり方を教わらんといかん」と悔しがったものです。

７３年の神戸市長選は共産、社会、公明、民社の４党共闘で勝ちました。７０年代にはそんな時期があったんです。公明党幹部は「今、（路線問題で）迷ってるんだ」とよく言っていました。

７２年衆院選で共産党が野党第２党になると、国政で革新統一戦線が実現するかが、大きな焦点となりました。７０年の第１１回党大会で統一戦線を作るための「革新３目標」を提唱していた我々は、７３年の第１２回党大会で「民主連合政府綱領案」を発表し、「７０年代の遅くない時期」の民主連合政府樹立を目指しました。

≪こうした共産党の躍進に対し、自民党は「自由社会を守るキャンペーン」を展開した。公明党も共産党批判を強めたが、支持母体の創価学会と共産党は７４年１２月、相互不干渉や共存をうたった「創共協定」を結んだ。しかし、後に見解の相違が明らかになり形骸（けいがい）化した。７６年１月には、民社党の春日一幸委員長が戦前の「スパイ査問事件」を国会で取り上げ、共産党の宮本顕治委員長を非難した≫

「反共攻撃」が激しさを増す中、７６年衆院選では共闘する無所属を含めた議席を１９に減らしました。７９年衆院選では４１議席を得ましたが、８０年代になると状況は大きく変わっていきました。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（18）／共産排除の「オール与党」

2010.11.25　朝刊　12 頁

１９７０年代は社会党とかなり論戦を交わしましたが、７７年には、宮本顕治共産党委員長と成田知巳社会党委員長との間で国政レベルの統一戦線結集の協定を結びました。後継の飛鳥田一雄社会党委員長とも、同じ趣旨の確認をしました。

しかし、社会党がこうした合意を無視して、８０年１月、公明党との間で共産党排除を公然とうたった政権協定（社公合意）を結ぶと、局面は一変しました。国会内外のあらゆる分野で共産党排除が進み、私たちが「共産党以外のオール与党体制」と呼ぶ時代が始まったのです。

（右から）成田知巳社会党委員長、宮本顕治共産党委員長の会談に同席する不破さん（1977年）

国会運営での「共産党外し」は、露骨でした。

私が６９年に初当選してからの３年間、共産党は国会運営に関する各党の会談に入れませんでした。それは、議院運営委員会に理事を出す院内交渉団体ではないという理由からでした。

ところが、オール与党の時代には、うちより小さな新自由クラブは国会対策の会談に入れるのです。全く政治的な共産党外しでした。地方選挙での革新共闘も、主要な自治体ではほとんど消えていきました。

≪共産党は、社公合意後の８０年２月に開いた第１５回党大会で、無党派層と共闘する方針を打ち出した。翌年には、作家の松本清張氏らが世話人となり、「平和・民主・革新の日本をめざす全国の会」（全国革新懇）が結成された≫

党大会に来た欧州の共産党の代表たちは「統一戦線というのは社会党との統一戦線のことで、無党派との共闘はありえない話だ」と口々に言うんです。日本の状況を分かってもらうには、ずいぶん時間がかかりました。ある代表が最後に「分かった。だが、それは実に勇気のいる方針だ」と語ったのが印象的でした。

しかし、革新懇には社会党の「右傾化」に甘んじない社会党・総評系の人たちや多くの文化人が勇気を持って参加してくれました。今は４７都道府県に加え、地域、職場など８００を超す革新懇が活動しています。

７０年代は、野党で一番右にいた民社党も「革新」を名乗っていたほどで、日米安全保障条約の現状をよしとする野党はありません。国内では、公害や物価問題を起こした大企業は国民の信頼を失い、「財界応援型政治」から抜け出すことが政治の大きなテーマでした。

８０年代は、社会党も大局で自民党政治の土俵に乗り、「日米安保体制絶対」「大企業応援型政治」が天下御免（ごめん）で息を吹き返した点が特徴だったと思います。財政危機や米軍基地問題など、現在の危機や矛盾の起点を私なりに探ると、ほとんどこの時期に集中します。

「ゼネコン政治」にしても、田中角栄氏の日本列島改造論は無駄な開発計画をまき散らしましたが、ともかく日本経済の土台作りを建前としていました。しかし、８０年代以後は意味不明の開発が花盛り。危機の扉を開けたという点で「オール与党体制」の責任は非常に大きいと思います。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（19）／アフガン侵攻を全面批判

2010.11.27　朝刊　12 頁

1979 年 12 月、宮本顕治委員長がモスクワを訪問して行われた日ソ共産党の首脳会談で、15 年ぶりに関係を正常化しました。ソ連側が干渉の誤りを認めたからです。アフガニスタンへの侵攻はその直後でした。

≪アフガンでは 79 年 12 月、ソ連の軍事介入によるクーデターが発生した。米国などはソ連を強く非難し、日本を含む 60 か国以上が 80 年のモスクワ五輪をボイコット。アフガンでは米国の援助を受けた反政府勢力が徹底抗戦し、ソ連軍は 89 年 2 月、完全撤退した≫

この暴挙は世界的な波紋を引き起こしました。

ソ連を支持したキューバのカストロ議長とは、84 年に会談しました。その真意をただすと、痛切な表情で「社会主義国として担う十字架だ」と答えました。

キューバは非同盟諸国会議の議長国でした。アフガンは加盟していましたが、社会主義国としてソ連を非難する立場に回るわけにはいかない。その真情を「十字架」という言葉

で表現したと受け取りました。

初めてモスクワを訪れ、ゴルバチョフ書記長（右）とあいさつを交わす不破さん（1985年3月）

私たちはソ連との関係を修復しても、侵略行為は認めませんでした。ソ連代表も出席した 80 年 2 月の第 15 回党大会で、私はアフガン侵略を全面的に批判しました。ある西欧の党代表がソ連崩壊後、「あの時、同時通訳のイヤホンから繰り返されたアフガニスタンという言葉が、今も耳に残っている」と語りぐさにしたほどです。

一方で、日ソ共産党は 84 年 12 月、核戦争阻止、核兵器全面禁止・廃絶などに関する共同声明を発表しました。意見の相違が残った点もありましたが、対立の歴史があり、アフガン問題でも論争していた両党が核兵器廃絶の共同声明をまとめたことは、大きな意義がありました。

日本では、12 か国の代表によるアピールを発表するなど共同声明の具体化にすぐ着手しました。

しかし、ソ連はさっぱりでした。共同声明をまとめたチェルネンコ書記長が 85 年 3 月に亡くなると、私は葬儀出席のため初めてモスクワを訪問し、ゴルバチョフ新書記長と会談しました。86 年 8 月には、共同声明実行を主題に初の定期首脳協議も行いました。

ゴルバチョフ書記長は、核兵器問題ではもっぱら対米交渉重視路線に傾きました。対日関係でも、社会党を盛んに美化したように、共同声明などは問題にしない立場を取りだしました。

88 年 5 月の定期協議で、私は社会党美化の問題を批判しました。彼は正面から批判を受けたことはないようで、顔を真っ赤にして言い返しました。ソ連側通訳は省略しましたが、「そんなことを言うのなら、荷物をまとめて東京に帰ってくれ」と言ったそうです。

私は、彼の「新しい思考」路線を批判する論文を何本も書きました。「新しい」という言葉はあっても、大国主義、覇権主義という点では、ゴルバチョフもソ連の古い思考につかったままだったと思います。

（政治部　烏山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（20）／「大国主義」ソ連崩壊の根

2010.11.29　朝刊　11 頁

1980 年代後半、自民党政治と「共産党以外のオール与党体制」への批判が強まりました。88 年 6 月に発覚したリクルート事件、89 年 4 月の消費税導入などによってです。89 年 3 月の千葉県知事選、4 月の名古屋市長選では、共産党推薦候補が自民党と他の野党との相乗り候補相手に善戦し、マスコミでも「地殻変動が起こるか」との声が聞こえるようになりました。

しかし、中国の天安門事件に続き、東欧でもソ連崩壊に至る激変が始まると、この流れは変わりました。

ベルリンの壁に登って歓喜する人々（1989年11月10日、ブランデンブルク門で）＝山岸直千撮影

天安門事件は 89 年 6 月 4 日でした。23 日に東京都議運が告示されましたが、町の空気が違うんです。

私は東京全区を応援する立場でした。でも、自分の選挙区の町に行けば、この店の人は手を振ってくれると分かります。この時は違いました。最終盤、宣伝カーで選挙区を回っても人が出てこない。強烈な逆風で都議選と直後の参院選は後退を余儀なくされました。

≪東欧でも、民主化を求める動きが強まった。89 年 11 月には、東西冷戦構造と東西ドイツ分断の象徴だった「ベルリンの壁」が崩壊した。東欧各国の社会主義政権が相次いで倒れ、91 年にはソ連が崩壊した≫

ベルリンの壁崩壊からソ連崩壊に至る約 2 年間、刻々と動くソ連・東欧情勢を分析し、どんな事態が進んでいるかを解明するため、会議を何度も開きました。

私たちにとっては、ことの本質は明確でした。崩壊の根は、社会主義の精神に背いたソ連の大国主義にありました。だから、私たちはソ連共産党解体の報に接した時、「歴史的巨悪の崩壊を歓迎する」という態度をただちに明らかにしたのです。

≪この時期の選挙では、自由主義か社会主義かの「体制選択論」が争点となり、共産党は苦戦した。党内から宮本顕治議長ら幹部の退陣や党名変更、民主的な党運営を求める声も出た。92 年 8 月、週刊文春が「共産党の野坂参三名誉議長が戦前、ソ連で活動していた

同志を無実のスパイ容疑で密告していた」と報道。共産党は野坂氏を解任し、最終的には除名した≫

「野坂問題」では党の調査に対し、本人が事実関係をすべて認めました。資料を入手するため、モスクワにも人を派遣しました。相手は出したがりませんでしたが、「メディアに流して、当事者の我々に渡さない道理はないはずだ」と頑張って、日本共産党にかかわるソ連共産党の内部資料を大量に手に入れました。

資料には、我々が知らなかったスターリンと後継者たちの日本共産党に対する干渉活動の全容が、生々しく記録されていました。

私は「干渉と内通の記録」と題するドキュメントを執筆しました。スターリンが戦後の日本に対して行った工作の起点から、フルシチョフ、ブレジネフ時代に至る長編となりましたが、ソ連自身の文書で覇権主義のむき出しの姿を描き出す記録になったと、ひそかに自負しています。

（政治部　烏山忠志）